

ステレオタイプ内容モデルの再検討： 職業イメージを対象として

A Re-examination on Stereotype Content Model: Study on Occupational Images

佐 久 間 勲¹⁾

Isao Sakuma

Abstract

This study investigated occupational images in order to re-examine stereotype content model (SCM; Fiske et al., 2002). One hundred and forty Japanese undergraduates participated in questionnaire survey. Participants rated images of eleven occupations on warmth and competence dimensions. Then they rated the status and the competitiveness of eleven occupations. It was found that lawyers, engineers and doctors were evaluated competent but cold, and that carpenters, idol singers, and university students were evaluated warm but incompetent. Perceived status of occupations was positively correlated with evaluation of competence of occupations, and perceived competitiveness negatively correlated with evaluation of warmth of occupations. These results supported SCM hypothesis and suggested that SCM might be valid.

1. 問題

本研究の目的は、職業イメージを対象として、ステレオタイプ内容モデル（stereotype content model、以下 SCM、(Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)）の妥当性を再検討することである。

SCM はステレオタイプの内容や、その内容が社会構造的要因によって規定されることを説明するモデルである（代表的なレビューとしては、Cuddy, Fiske, & Glick (2008)）。SCM の概要（仮説）は次の通りである（Cuddy et al., 2009）。第一に、ステレオタイプはあたたかさ（warmth）と知的能力（competence）の2次元から構造化されている。これは2次元仮説

（two dimensions hypothesis）と呼ばれている。第二に、多くのステレオタイプは一方の次元を高く評価し、他方の次元を低く評価する両面価値的（相補的）な内容になっている。これは両面価値的ステレオタイプ仮説（ambivalent stereotypes hypothesis）と呼ばれている。具体的には、「知的能力は高いけれども冷たい」、もしくは「あたたかいけれども知的能力が低い」というステレオタイプが多い。²⁾ 第三に、社会構造的要因がステレオタイプの内容を規定している。これは社会構造仮説（social structural hypothesis）と呼ばれている。具体的には、内集団よりも地位が高いと認知する外集団に対しては知的能力が高いと評価する一方で、内集団

1) 文教大学情報学部准教授

2) すべてのステレオタイプがあたたかさや知的能力の2次元において両面価値的な内容になっているわけではない。ステレオタイプの中には「あたたかく知的能力も高い」というように2つの次元が高く評価されたり、「冷たく知的能力も低い」というように2つの次元が低く評価されたりするものもある。

よりも地位が低いと認知する外集団に対しては知的能力が低いと評価する。さらに内集団と競争的な関係にあると認知している外集団に対してはあたたかくない（冷たい）と評価し、協力的な関係にあると認知する外集団に対してはあたたかいと評価する。

SCMの提唱者であるFiskeらの一連の研究により、このモデルの妥当性は繰り返し検証されている（Cuddy et al., 2008）。たとえばFiske, Xu, Cuddy, & Glick（1999）やFiske et al.（2002）は、複数の社会集団やカテゴリーのステレオタイプの内容を検討している。その結果、たとえば高齢者、主婦、知的障がい者は「あたたかいけれども知的能力が低い」、富裕者、フェミニスト、女性実業家は「知的能力は高いけれども冷たい」という両面価値的ステレオタイプを持たれていること、内集団よりも地位が高いと認知する外集団ほど知的能力が高く、内集団と競争的であると認知する外集団ほどあたたかくない（冷たい）と評価されていることを明らかにしている。佐久間（2015）も、Fiske et al.（1999）やFiske et al.（2002）とほぼ同様の研究を実施し、富裕者、キャリアウーマン、役人、官僚、政治家、会社経営者は「知的能力は高いけれども冷たい」、グラビアアイドルは「あたたかいけれども知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれていること、さらにSCMから予測される通り、地位や競争性という社会構造的要因の認知が、あたたかさや知的能力の評価と関連していることを見出している。

このようにSCMの妥当性を検討する研究は散見されるものの、日本では少数であり、妥当性の検討が十分になされているとはいえない状況である。そこで本研究では、佐久間（2015）とは異なる社会集団である職業を用いて、SCMの妥当性を再検討することを目的とする。具体的には次の2点について検討する。第一に、両面価値的ステレオタイプの内容（「あたたかいけれども知的能力が低い」「知的能力は高い

が冷たい」）に合致する職業イメージがあるか検討する。第二に、社会構造的要因である相対的地位や競争－協力関係が職業イメージを規定しているか、つまり調査対象者が所属する集団から見て相対的地位が高いと認知する職業に対しては知的能力が高いと評価をし、調査対象者が含まれる集団と競争的な関係にあると認知する職業に対してはあたたかくない（冷たい）と評価をするか検討する。なお佐久間（2015）では、調査対象者にとっての内集団を明確にせずに調査を実施した。それに対して本研究では、調査対象者を大学生とし、大学生というカテゴリーが内集団であるという前提で調査を実施する。

2. 方法

2-1. 調査対象者と手続き

文教大学で社会心理学関連の講義を受講している大学生140名（男性51名、女性89名）を対象に調査を実施した。調査は授業時間の一部を使用して実施した。回答に要した時間は、およそ10分であった。

2-2. 調査実施時期

2013年7月に実施した。

2-3. 調査項目

（1）職業イメージ

調査対象者に6組の対となる言葉を用いて、11の職業（大工、会社員、弁護士、アイドル歌手、専業主婦、プロスポーツ選手、エンジニア、フリーター、保育士、医者、大学生）に対するイメージについての回答を求めた（7件法）。11の職業は、両面価値的なステレオタイプが持たれていると予測されるものを中心に用意した。6組の対となる言葉は、村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林（2005）で用いられたもののなかから選択して使用した。6組のうちの半数はあたたかさ次元（「親しみやすい－親しみにくい」「冷たい－暖かい」「好き－嫌

い)、半数は知的能力次元（「頭がよい－頭が悪い」「有能でない－有能である」「知的な－知的でない」）に関するものであった。イメージの回答順序については、その効果を相殺するために、回答順序が異なる質問紙を2種類用意した。

(2) 相対的地位の認知

調査対象者にとって内集団である大学生と、それ以外の10のそれぞれの職業を比較した場合、どちらの方が地位が高いと思うか回答を求めた（「大学生の方が地位が高い」「やや大学生の方が地位が高い」「同じくらいである」「やや比較の対象となる職業の人々の方が地位が高い」「比較の対象となる職業の人々の方が地位が高い」の5件法）。

(3) 競争－協力関係の認知

大学生と、それ以外の10のそれぞれの職業との関係が、どの程度競争的（一方の職業が利

益を得ると他方の職業は損失を被る）または協力的（お互いの職業が共存共栄できる関係）であると思うか回答を求めた（「競争的」「やや競争的」「どちらともいえない」「やや協力的」「協力的」の5件法）。

(4) その他

大学生と、それ以外の10のそれぞれの職業が、どの程度類似していると思うか（「似ている」「やや似ている」「どちらともいえない」「やや似ていない」「似ていない」の5件法）、調査対象者の家族の中で大学生以外の10のそれぞれの職業に就いている人がいるか回答を求めた。さらにデモグラフィック変数として、性別、年齢、留学生か否か回答を求めた。

3. 結果

3-1. 2次元から見た職業イメージ

個人の回答を分析の単位として、11の職業

表1 職業に対するあたたかさ得点、知的能力得点、相対的地位の認知、競争－協力関係の認知の平均値（標準偏差）

職業	あたたかさ		知的能力		相対的地位 の認知		競争－協力 関係の認知	
	得点	t値	得点	t値		t値		t値
大工	4.25 (0.90)	3.24**	3.71 (0.96)	3.59***	3.99 (1.00)	11.71***	2.68 (0.85)	4.48***
会社員	3.97 (0.72)	.55	4.49 (0.59)	9.89***	4.51 (0.67)	26.49***	2.69 (0.96)	3.90***
弁護士	3.14 (0.82)	12.32***	6.32 (0.81)	33.65***	4.89 (0.35)	62.86***	2.82 (1.04)	2.03*
アイドル歌手	4.46 (1.20)	4.52***	3.20 (0.96)	9.81***	3.68 (1.11)	7.26***	2.72 (1.11)	2.96**
専業主婦	5.02 (0.92)	12.99***	4.17 (0.64)	3.18**	3.76 (0.88)	10.30***	2.45 (0.90)	7.22***
プロスポーツ選手	4.71 (0.98)	8.60***	4.39 (0.87)	5.32***	4.76 (0.55)	37.94***	2.81 (1.05)	2.09*
エンジニア	3.46 (0.75)	8.48***	5.59 (0.92)	20.52***	4.63 (0.58)	33.25***	2.82 (0.93)	2.27*
フリーター	3.86 (0.85)	1.90+	3.12 (0.89)	11.69***	2.53 (1.06)	5.21***	3.36 (1.01)	4.21***
保育士	5.75 (0.77)	26.85***	4.40 (0.77)	6.12***	4.31 (0.71)	21.83***	2.60 (0.88)	5.38***
医者	3.75 (0.84)	3.55***	6.23 (0.88)	30.08***	4.93 (0.31)	73.81***	2.65 (1.09)	3.79***
大学生	4.72 (0.86)	9.96***	3.89 (0.72)	1.84+				

注1) あたたかさ得点、知的能力得点の取り得る値の範囲は1から7。数値が高いほど、それぞれの職業に対してあたたかい、知的能力が高いというイメージを持っていることを意味する。相対的地位の認知、競争－協力関係の認知の取り得る値の範囲は1から5。数値が高いほど、それぞれの職業が大学生よりも地位が高い、大学生と競争的な関係にあると認知していることを意味している。

注2) *** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$ 。

3) あたたかさ得点と知的能力得点を算出する尺度の信頼性を確認するために、11の職業ごとに α 係数を算出した。その結果、あたたかさ得点を算出する尺度の α 係数は.52～.68、知的能力得点を算出する尺度の α 係数は.31～.68であった。知的能力得点を算出する尺度の α 係数が低い職業も見られたが、職業間でのイメージの比較をすることも考えて、本研究ではこのままそれぞれの尺度から算出された得点を使用することにした。

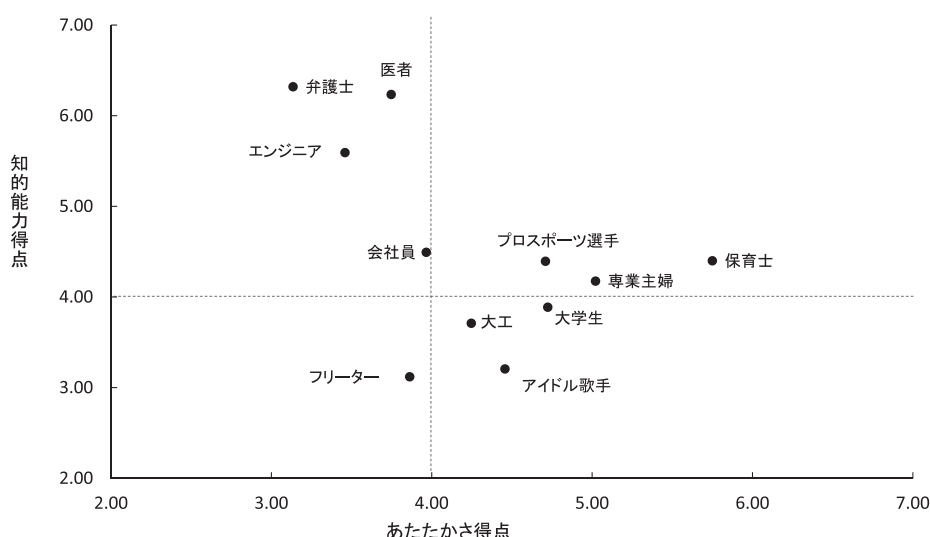


図1 あたたかさ得点と知的能力得点の散布図

ごとに、あたたかさおよび知的能力に関連する対となる言葉の平均値を算出し、それぞれをあたたかさ得点、知的能力得点とした（表1）。³⁾ 加えて、11の職業を分析の単位として、それぞれの職業のあたたかさ得点と知的能力得点をもとに散布図を作成した（図1）。

それぞれの職業に対するイメージが明確であるかを検討するために、佐久間（2015）と同様に、得点の理論的中央値（4点）と、それぞれの職業のあたたかさ得点、知的能力得点の平均値の差についてt検定を実施した。その結果、大工、アイドル歌手、専業主婦、プロスポーツ選手、保育士、大学生のあたたかさ得点の平均値は理論的中央値と比較して有意に高かった（ $ts>3.23$, $ps<.01$ ）。他方、弁護士、エンジニア、フリーター、医者のあたたかさ得点の平均値は理論的中央値と比較して有意に低い、または有意に低い傾向が見られた（ $ts>1.89$, $ps<.10$ ）。

さらに会社員、弁護士、専業主婦、プロスポーツ選手、エンジニア、保育士、医者の知的能力得点の平均値は理論的中央値と比較して有意に高かった（ $ts>3.17$, $ps<.01$ ）。他方、大工、アイドル歌手、フリーター、大学生の知的能力得点の平均値は理論的中央値と比較して有意に低い、または有意に低い傾向が見られた（ $ts>1.83$, $ps<.10$ ）。

t検定の結果をまとめると、弁護士、医者、エンジニアは、知的能力得点が理論的中央値よりも有意に高くあたたかさ得点が有意に低いものに対して、大工、アイドル歌手、大学生は、あたたかさ得点が理論的中央値よりも有意に高く知的能力得点が有意に低かった。専業主婦、プロスポーツ選手、保育士は、2つの得点の両方が理論的中央値よりも有意に高いものに対して、フリーターは2つの得点の両方が理論的中央値よりも有意に低かった。⁴⁾

4) 11の職業ごとに、個人の回答を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の間の Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、大工、大学生、アイドル歌手、専業主婦、フリーター、保育士では有意な正の相関が確認された（ $rs>.19$, $ps<.05$ ）。エンジニアでは有意な負の相関が確認された（ $r=-.27$, $p<.01$ ）。さらに職業を分析の単位として、あたたかさ得点と知的能力得点の間の Spearman の順位相関係数を算出した結果、負の相関が見られたが統計学的に有意ではなかった（ r (11) $=-.46$, $p=.16$ ）。

3-2. 社会構造的要因の認知と職業イメージの関連

個人の回答を分析の単位として、大学生以外の10の職業に対する相対的地位の認知、競争－協力関係の認知の平均値を算出した（表1）。

これらの平均値と理論的中央値（3点）との間に有意な差があるかを検討するために、t検定を実施した。相対的地位の認知については、フリーターの平均値は理論的中央値と比較して有意に低かった（ $t=5.21, p<.001$ ）。他方、それ以外の9つの職業の平均値は理論的中央値と比較して有意に高かった（ $t_s>7.25, p_s<.001$ ）。つまりフリーターは大学生よりも地位が低いと認知される一方で、それ以外の職業は大学生よりも地位が高いと認知されていた。競争－協力関係の認知については、フリーターの平均値が理論的中央値と比較して有意に高かった（ $t=4.21, p<.001$ ）。他方、それ以外の職業の平均値は理論的中央値と比較して有意に低かった（ $t_s>2.02, p_s<.05$ ）。つまりフリーターは大学生と競争的な関係にあると認知される一方で、それ以外の職業は大学生と協力的な関係にあると認知されていた。

次に社会構造的要因の認知と職業イメージの関連を検討するために、大学生を除く10の職業を分析の単位として、相対的地位の認知、競争－協力関係の認知と、それぞれの職業に関するあたたかさ得点、知的能力得点との間のSpearmanの順位相関係数を算出した。その結果、相対的地位の認知と知的能力得点の間に有意な正の相関が見られた（ $r(10) = .90, p<.001$ ）。ある職業が大学生と比較して地位が高いと認知されるほど、その職業は知的能力が高いと評価されていた。さらに競争－協力関係の認知とあたたかさ得点の間に有意な負の相関が見られた（ $r(10) = -.64, p<.05$ ）。ある職業が大学生と競争的な関係にあると認知されるほ

ど、その職業はあたたかくない（冷たい）と評価されていた。⁵⁾

4. 考察

本研究の目的は佐久間（2015）に引き続き、職業イメージ対象として、SCMの妥当性を再検討することであった。以下、2次元から見た職業イメージ、社会構造的要因の認知と職業イメージの関連の結果に基づき、SCMの妥当性を検討する。

4-1. 2次元から見た職業イメージ

理論的中央値（4点）とそれぞれの職業のあたたかさ得点、知的能力得点の平均値との差のt検定の結果に基づく、弁護士、医者、エンジニアに対しては「知的能力は高いけれども冷たい」、大工、アイドル歌手、大学生に対しては「あたたかいけれども知的能力は低い」という両面価値的ステレオタイプが持たれている可能性が示唆された（図1を参照）。これらの結果は、SCMの2次元仮説および両面価値的ステレオタイプ仮説を支持するものであった。

SCMでは、内集団や友好的な集団は2次元の両方において高く評価されると考えられている（Cuddy et al., 2008; Fiske et al., 2002）。しかし本研究では、調査対象者にとって内集団と考えられる大学生は「あたたかいけれども知的能力は低い」という両面価値的ステレオタイプが持たれている可能性を示唆する結果が得られた。この結果については、第一に、大学生の学力低下に関する言説（e.g., 日本数学会, 2012）が影響している可能性が挙げられる。近年、大学生の学力低下に関する言説は、メディア報道を中心としてたびたび話題にされている。こうした言説が大学生の知的能力に関するイメージに影響したと考えられる。第二に、調査対象者が自己卑下的自己呈示をした可能性が挙げられ

5) 職業を分析の単位として、相対的地位の認知と競争－協力関係の認知の順位相関係数を算出した結果、有意ではなかった（ $r(11) = .02, ns$ ）。

る。知的能力が高いイメージを与えようとする自己宣伝のような自己高揚の自己呈示することは好ましくないイメージを持たれる可能性がある (e.g., 吉田・古城・加来, 1983) ために、知的能力次元で内集団である大学生を低く評価したと考えられる。第三に、調査対象者である大学生自身が大学生というカテゴリーを内集団と見なしていなかった可能性が挙げられる。内集団と見なしていなかったために、2つの次元のいずれでも高く評価する必要がなかったと考えられる。

その一方で、大学生にとって内集団とは考えにくい専業主婦、プロスポーツ選手、保育士に関しては、2つの次元の両方において高く評価されていた。つまり「あたたかく知的能力も高い」というイメージを持たれていることを示唆する結果が得られた。ただし分析方法や判断基準によっては、これらの職業は「あたたかく知的能力が高い」というイメージを持たれていない可能性も考えられる。たとえば Fiske et al. (2002) は、それぞれの社会集団やカテゴリーのあたたかさ次元と知的能力に関する指標の平均値の間に統計学的な有意差があるかどうかで、両面価値的ステレオタイプを持たれているかを検討している。この方法を用いて本研究の結果を検討すると、保育士、専業主婦、プロスポーツ選手は、知的能力得点と比較してあたたかさ得点のほうが高い、つまり「あたたかいけれども知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプが持たれていると解釈することも可能である。さらに村田 (2006) は、2つの次元で高く評価されている社会集団やカテゴリーであっても、相対的にあたたかさ次元が高く評価されているものと、知的能力次元が高く評価されるものに区別できることを指摘している。村田 (2006) の指摘に従って本研究の結果を解釈すると、専業主婦、プロスポーツ選手、保育士は、2つの次元で高く評価されているものの相対的にあたたかさ次元で高く評価されている集団と解釈することも可能である。

佐久間 (2015) では2つの研究を通して、「知的能力は高いけれども冷たい」という両面価値的ステレオタイプを持たれている複数の社会集団やカテゴリー (たとえば富裕者、キャリアウーマン、役人、官僚、政治家、会社経営者) が確認された一方で、「あたたかいけれども知的能力は低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれている社会集団やカテゴリーはグラビアアイドルのみが確認されただけであった。それに対して本研究では、グラビアアイドルと類似した職業であるアイドル歌手だけではなく、大工、大学生が「あたたかいが知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプを持たれていることを示唆する結果が得られた。つまり日本においても、「あたたかいけれども知的能力が低い」という両面価値的ステレオタイプに合致する社会集団やカテゴリーがいくつか存在することが明らかになった。この結果は、SCMの両面価値的ステレオタイプ仮説をより強く支持するものと言える。

4-2. 社会構造的要因の認知と職業イメージの関連

調査対象者にとって内集団と考えられる大学生と10の職業との関係と、10のそれぞれの職業に対するイメージの関連を検討したところ、大学生と比較して地位が高いと認知する職業に対しては知的能力が高いというイメージを持っていた。さらに大学生と競争的な関係にあると認知している職業に対しては、あたたかくない (冷たい) というイメージを持っていた。これらの結果は、社会構造的要因の認知、具体的には内集団と比較したときの外集団の地位や競争-協力関係の認知が、ステレオタイプの内容を規定するという SMC の社会構造仮説を支持するものであった。

4-3. まとめと今後の課題

職業イメージを研究対象とした本研究の一連の結果は、SCM が妥当なものであることを示

唆していた。ただし本研究には以下に挙げる課題が残されている。

第一に、両面価値的ステレオタイプの判断基準である。本研究では佐久間 (2015) と同様に、ある社会集団のあたたかさとか知的能力の2つの次元の得点が理論的中央値と有意差があるかどうかを基準にして、両面価値的ステレオタイプを持たれているかどうかを判断した。一方、Fiske et al. (2002) では、ある社会集団のあたたかさ次元に関する得点と知的能力次元に関する得点の間に有意差があるかどうかを基準にして、両面価値的ステレオタイプを持たれているかどうかを判断している。これらの2つの基準のどちらを用いるかによって、ある社会集団がどのようなステレオタイプを持たれているのか判断が異なることがある。妥当性のある両面価値的ステレオタイプの判断基準について検討する必要があるだろう。

第二に、社会構造仮説に関する問題である。本研究は社会構造的要因である外集団の地位および外集団との競争-協力的な関係に関する尺度と、職業イメージであるあたたかさ得点と知的能力得点との間の相関関係を検討することを通して、社会構造仮説の妥当性を検討した。しかし本研究の結果は相関関係を示したに過ぎず、社会構造的要因により外集団ステレオタイプの内容が規定されるという因果関係を強く主張するための証拠としては不十分であるかもしれない。Caprariello, Cuddy, & Fiske (2009) は社会構造的要因を実験的に操作し、その結果として外集団のステレオタイプが変わるか検討をしている。今後、Caprariello ら (2009) のように因果関係を特定できる実験的研究も必要であろう。

引用文献

- Caprariello, P. A., Cuddy, A. J. C., & Fiske, S. T. (2009). Social structure shapes cultural stereotypes and emotions: A causal test of the stereotype content model. *Group Processes and Intergroup Relations*, 12, 147-155.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The Stereotype Content Model and the BIAS Map. In M. P. Zanna (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149). New York: Academic Press.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., Kwan, V. S. Y., Glick, P., Demoulin, S., Leyens, J.-P., Bond, M. H., Croizet, J.-C., Ellemers, N., Sleebos, E., Htun, T. T., Kim, H.-J., Maio, G., Perry, J., Petkova, K., Todorov, V., Rodríguez-Bailón, R., Morales, E., Moya, M., Palacios, M., Smith, V., Perez, R., Vala, J., & Ziegler, R. (2009). Stereotype content model across cultures: Towards universal similarities and some differences. *British Journal of Social Psychology*, 48, 1-33.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. C., & Glick, P. (1999). (Dis) respecting versus (dis) liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, 55, 473-489.
- 村田 光二 (2006). 外国人イメージの構造: 調査データに基づく考察 森村敏己 (編) 視覚表象と集合的記憶-歴史・現在・戦争-(pp.203-233.) 旬報社
- 村田 光二・稲葉 哲郎・向田 久美子・佐久間 勲・樋口 収・高林 久美子 (2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ

- (1) -愛国心、ナショナリズム尺度の検討-
日本社会心理学会第46回大会発表論文集,
64-65.
- 日本数学会 (2012). 「大学生数学基本調査」に
基づく数学教育への提言 Retrieved from
[http://mathsoc.jp/comm/kyoiku/
chousa2011/](http://mathsoc.jp/comm/kyoiku/chousa2011/) (2017年12月5日)
- 佐久間 勲 (2015). 社会集団に対するイメージ:
ステレオタイプ内容モデルの検討 生活科
学研究, **37**, 67-75.
- 吉田 寿夫・古城 和敬・加来 秀俊 (1983). 児
童の自己呈示の発達に関する研究 教育心
理学研究, **30**, 120-127.